

研究報告

早期体験型の老年看護学実習における看護学生の学びの様相 —実習前後での高齢者イメージ・高齢者観に焦点をあてて

The learning of nursing students in the early nursing practicum at facilities for the elderly
— Focus on images and perspectives concerning the elderly before and after the early exposure

金原京子¹⁾ Kyoko Kimbara, 小川宣子¹⁾ Noriko Ogawa, 田中真佐恵¹⁾ Masae Tanaka,
吉井輝子¹⁾ Teruko Yoshii, 松田千登勢¹⁾ Chitose Matsuda

要 旨 本研究の目的は、実習前後の高齢者イメージや高齢者観に焦点をあて早期体験型の老年看護学実習 I における学生の学びを明らかにすることである。研究に同意が得られた101名の学生の実習記録から実習前後の高齢者のイメージや高齢者観に関する記述を抽出し、計量的テキスト分析ソフト(KH coder)を用いて分析した。結果、加齢現象に関する記述は実習前後に共通して見られ、身体的な側面では高齢者を虚弱な対象としてとらえる学生の傾向に変化はなかった。しかし、心理面や社会面においては、実習後に「元気」「明るい」や「気持ち」「前向き」などの語が増え、肯定的な捉え方が生じていた。本研究を通して高齢者施設での早期体験型老年看護学実習は、学生が高齢者の心理面や社会面でのもてる力を実感できる契機となりうることが示唆された。今後も教育環境や方法を工夫しながら、学生が高齢者を全人的に捉える感性を育めるよう支援していく必要がある。

キーワード 高齢者イメージ、高齢者観、看護学生、早期体験実習、計量的テキスト分析

I. はじめに

近年、わが国は超高齢社会に突入し看護の対象も高齢者が非常に増え、老年看護学実習であるか否かに関わらず学生が臨地実習で関わる対象も高齢者が大半を占めるようになった。しかし、昨今の若年者は核家族化の進行により高齢者との同居割合が少なく、日常的にも高齢者と接する機会が乏しいことから普段の生活の中で高齢者を理解することが困難になっている。さらに認知症高齢者による交通事故の多発や、オレオレ詐欺の被害の増加、介護負担による介護者の殺人、孤独死など、マスメディアで取り上げられる高齢者にまつわるニュースの多くは負の側面が強く高齢者を弱まっている対象者として捉えがちである。

しかし、専門職の高齢者観はサービスの質に影響

し、肯定的な高齢者観はサービスの質の向上、否定的な高齢者観は質の低下を招くと言われている(Coe, 1967; 松下ら, 1995)。そのため中島ら(2009)も、看護学基礎教育課程の老年看護学においては高齢者のもっているパワー(生命力, 英知, 生きる技法等)の肯定的側面に着目する重要性を指摘しており、学生が高齢者に肯定的なイメージを抱くことができるように働きかけていくことは重要な教育課題のひとつとなっている。

また、早期体験実習は幅広い見識、技術と確固たる倫理観を身につけた人材を育成すべく、早期の段階から医師等を目指す動機づけ、使命感の体得等を目的(文部科学省, 1995)として各大学でも導入が進んでいる。看護教育における早期体験実習に関する文献検討を行った早川ら(2016)は、病院での実習が多く地域の施設での早期体験型実習の実施が少

1) 摂南大学看護学部 Faculty of Nursing, Setsunan University

ないことを報告している。また、医療施設と地域の施設で1日ずつ見学実習を行っている大学からは、医療施設では健康障害に伴う苦痛の理解、地域の施設が高齢者施設であった場合には対象者である高齢者の特徴理解が深まり、高齢者を生活者として捉える視点が生じていたことが報告されている(皆川ら, 2006)。

こうした状況に鑑みA大学は2016年度から1年次の基礎看護学実習Ⅰと併行させる形で、高齢者施設で行う老年看護学実習Ⅰを設け、2年次、3年次と段階的に老年看護学実習を進める新カリキュラムに移行した。入学後の早い段階で実習を設けたのは、高齢者を取り巻く地域や社会システムに触れることで、高齢者への関心を高め、高齢者看護を学ぶ基盤をつくることを意図してのことである。

高齢者施設での早期体験型実習実施校はまだ少ないため、本実習での学生の学びを明らかにすることは高齢者施設での早期体験型実習の成果や意義を示す一資料となる。また、高齢者のイメージ研究はSemantic Differential Method (SD法) など、予め設けられたイメージに関する選択肢から学生が自分のイメージに近いものを選ぶといった方法論がとられることが多いが、計量的テキスト分析は予め想定された要素だけではない学生の「生の学び」を抽出できる利点がある。よって、本研究ではこの分析方法を用い、より具体的な学生の学びを明らかにする。

Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は早期体験型の老年看護学実習Ⅰの前後での学生の高齢者イメージや高齢者観に焦点をあて、実習における学生の学びを明らかにすることである。

Ⅲ. 用語の定義

イメージとは「ある物事について抱く全体的な感じ、心象や印象」とある。よって「高齢者イメージ」は高齢者に対して抱く心象や印象となる。また、

「観」の意味するところはイメージより広く、「物事を見て意味や本質を捉える、考えること、物の見かたや考え方」とある。よって「高齢者観」とは「高齢者イメージからもたらされる高齢者に対する捉え方、考え方」であることから、本研究では「高齢者イメージ」がさらに深まった段階のものとして「高齢者観」を定義する。

Ⅳ. 研究方法

1. 老年看護学実習Ⅰの位置付け

カリキュラム改革施行前後のカリキュラム編成を図1に示す。従来のカリキュラムでは3年次後期～4年次前期に高齢者施設で2単位、病院で2単位の实習を行っていたが、新しいカリキュラムでは1年次の9月に高齢者施設の通所で1単位の老年看護学実習Ⅰを行い、2年次の2月に高齢者施設の入所フロアで1単位の老年看護学実習Ⅱを実施、3年次後期に病院で高齢患者を受け持つ2単位の老年看護学実習Ⅲを行う。また、講義科目との関連としては、1年次の老年看護学実習Ⅰを終えた後期に実習でのふりかえりを行いながら老年看護学概論を行い、2年次後期に老年看護学援助論Ⅰで日常生活援助を中心とした高齢者看護のあり方を学んだ後に高齢者施設の入所者を対象とした老年看護学実習Ⅱに進む。そして、3年次前期に老年看護学実習Ⅱでの学びを踏まえながら老年看護学援助論Ⅱで日々の生活のしづらさだけでなく疾患からもたらされる症状に対する看護を学んだ後、老年看護学実習Ⅲで病院に入院している高齢者の看護展開を学ぶ流れとし、実習と講義を有機的に組み合わせた。

2. 老年看護学実習Ⅰの概要

実習目的は、地域で暮らす高齢者とのかかわりを通して、高齢者の身体的・心理的・社会的変化や特徴を理解することである。実施時期は1年次9月の1週間で、何らかの疾患をもちながらも地域社会で個々の生活スタイルを維持しながら暮らす高齢者と接することを目的に通所リハビリテーション・通所介護計10所(1施設5～8名)にて火～木曜日の3

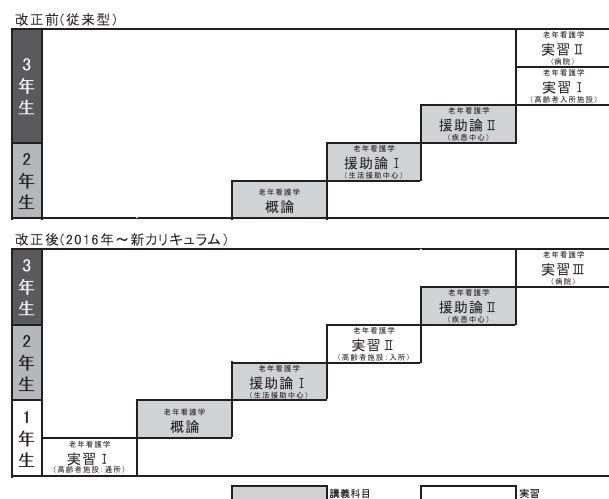


図1 カリキュラム改正前後の科目配置

日間、臨地実習を行った。学生は、実習前に高齢者に対するイメージや高齢者観を記録し、実習中に施設の概要、日々の記録、高齢者の特徴（身体的・心理的・社会的側面）を、実習後に実習を終えての高齢者に対するイメージや高齢者観、実習を通しての学び、今後の自己の課題についての記録を行った。1年次前期は一般教養科目がほとんどで、実習前に看護の専門科目で履修しているのは看護学概論と対人関係論の2科目のみである。看護技術は学んでおらず、老年看護学概論も未履修で高齢者に対する専門的な知識には触れていない。また、老年看護学実習Iと併行して基礎看護学実習I（実習施設：病院）が行われ、すべての学生が高齢者施設で1単位、病院で1単位の実習を行っている。

3. 対象

平成28年度にA大学にて老年看護学実習Iを履修した学生112名のうち、本研究に同意を得られた101名の学生の実習記録。

4. 研究期間およびデータ収集方法

平成29年4月、対象学生が成績確定し、進級した時点で本研究の主旨および研究に関する配慮について口頭および文書で説明した。同意書の提出をもって同意が得られたものと判断し、その際、学生の属性を明らかにするために研究協力者には高齢者との同居経験や現在の高齢者との接触頻度について回答してもらった。また、分析対象となる実習前後の高

齢者のイメージや高齢者観についての実習記録の記述をExcelに入力し、データベースとした。

5. 分析方法

実習前後の高齢者のイメージや高齢者観の記述をデータベースとした。実習目的は高齢者の身体的・心理的・社会的特徴の理解で実習記録に各項目に対する学びの記述も設けているが、学生は実習前には高齢者に関する専門的知識を得ておらず、実習前に身体・心理・社会に分けて記載させるのは困難なため、大きく高齢者イメージや高齢者観として実習の前後で記載させた。また、こうすることで、身体面の記述が多いなど三側面の過多を読み解くこともできる。

分析には樋口（2014）の開発した計量的テキスト分析ソフトであるKH coderを用いた。具体的手順としてはテキストデータの形態素分析を実施し、頻出語（複数回出現する語）の抽出および共起ネットワーク分析によって実習前後での学生の高齢者に対するイメージや高齢者観を比較した。なお、頻出語や共起ネットワーク分析にあたっては、助詞や助動詞などのようにどの文章にも現れ、その語句自体では意味をなさない一般的な語句もあるため、それらを除外し名詞、形容詞、動詞を分析対象とした。頻出上位語を見ると学生の視点や関心がどこに向いているかが推察でき、実習前後での頻出上位語の並びの変化を見ることで学生の観点の変化を読み取ることができる。しかし、頻出語だけで学生の傾向を推察するのは不十分であるため本研究では共起ネットワーク分析を合わせて実施した。共起とはテキストデータ内にある語と他の語と一緒に出現することをいい、共起する語を線で結んだものを共起ネットワークという。共起ネットワーク分析の結果が視覚的に表示されるサブグラフは出現数の多い語ほど大きな円、強い共起関係ほど太い線で結ばれる。よってサブグラフを読み解くことで頻出語だけでは読み解けない「文脈」の推測が可能になる。今回は実習前後のサブグラフで共通してみられた語群、実習後に新たに抽出された語群、実習後になくなった語群といった観点からサブグラフを検討した。なお、共

起ネットワーク分析における語の位置関係は線で結ばれているかが重要であり、各々の語群が近くに付置されていたとしても線で結ばれていなければ語群間に共起関係は存在しないことを付言しておく。

6. 倫理的配慮

本研究の主旨および研究に関する倫理的配慮については、対象者に口頭および文書で説明し、同意を得た。説明内容は①研究への協力は自由意思であり、強制ではなく、拒否をしても今後の老年看護学領域の成績には一切関係がない、②データの解析はすべて匿名で行われ、個人が特定されない、③研究成果は学内外で発表を行うが、本研究の目的以外では用いない、④入力されたデータはパスワードのかかったファイルにて厳重に管理する旨であった。なお、本研究は摂南大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」の承認を得て行った(承認番号2016-068)。

V. 結果

1. 有効回答および対象者の属性

実習参加者は112名であったが、研究に同意を得られたのは101名であり有効回答率は90.2%であった。研究協力者101名のうち、男性は17名(16.8%)、女性は84名(83.2%)であった。高齢者との同居経験は、現在同居中が15名(14.9%)、過去に同居経験ありが15名(14.9%)であり、ほとんどの学生が高齢者と暮らした経験がなかった。また、現在の高齢者との接触頻度は、毎日が15名(14.9%)、週に数回が21名(20.8%)、月に数回が35名(34.7%)、半年に数回が10名(9.9%)、年に数回とほとんどなしが各々10名(9.9%)で、日常的に月に数回以上、高齢者と接している学生は7割程度で、3割は年に数回しか高齢者と接していなかった。

2. 実習前後での高齢者イメージや高齢者観の比較

自由記述の単純集計を行ったところ、実習前は1,044の文が確認され、分析に用いた名詞・形容詞・副詞・動詞の総抽出語数(分析対象に含まれているすべての語ののべ数)は5,865語、異なり語数(何種類の語が含まれていたかを示す数)は1,162語であっ

表1 実習前後の高齢者イメージ・高齢者観の自由記述に記載された頻出上位50語

順位	実習前		実習後	
	語	出現回数	語	出現回数
1	人	149	人	217
2	多い	109	多い	177
3	高齢	106	高齢	135
4	イメージ	88	思う	127
5	身体	74	イメージ	121
6	思う	66	自分	113
7	自分	65	話す	76
8	経験	64	身体	71
9	時間	52	感じる	67
10	耳	52	実習	61
11	低下	51	持つ	49
12	衰える	49	変わる	46
13	話す	44	元気	37
14	健康	41	認知	37
15	生活	39	話	35
16	不安	36	言う	33
17	豊富	36	前	32
18	好き	34	たくさん	30
19	考え方	33	病気	30
20	持つ	32	考える	29
21	弱い	32	見る	28
22	知識	32	好き	28
23	認知	30	経験	27
24	大きい	29	歩く	26
25	悪い	28	利用	26
26	病気	27	実際	25
27	遠い	26	違う	23
28	社会	26	耳	23
29	少ない	25	昔	23
30	趣味	23	動く	23
31	言う	22	リハビリ	21
32	考える	22	施設	21
33	食べる	21	聞く	21
34	人生	21	コミュニケーション	20
35	知恵	21	生活	20
36	聞こえる	21	大切	20
37	介護	20	知る	20
38	経済	20	強い	19
39	古い	20	今	19
40	目	20	時間	19
41	孤独	19	少し	19
42	必要	19	家族	18
43	年金	18	楽しい	18
44	たくさん	17	明るい	18
45	活動	17	来る	18
46	機能	17	お話し	17
47	精神	17	悪い	17
48	声	17	気	17
49	足腰	17	少ない	16
50	遅い	17	必要	16

※網をかけた語は、上位50位以内で実習前後に共通してみられた語である。

た。同様に、実習後は653の文が確認され、分析に使用した語の総抽出語数は6,630語、異なり語数は1,227語であった。実習前後での頻出上位50語(名詞、形容詞、動詞)を示したのが表1である。

上位にある「人」「多い」「高齢」「イメージ」「身体」「思う」「自分」といった語は実習前後に共通し

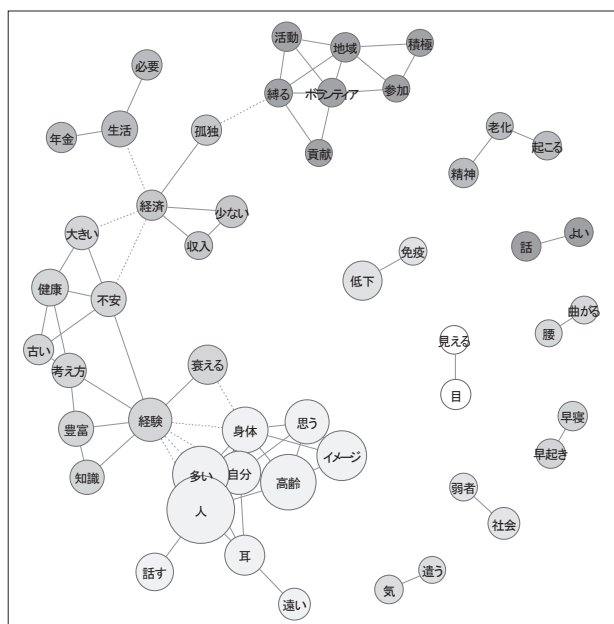


図2 実習前の高齢者観や高齢者イメージの共起ネットワーク分析結果

※つながりの深い語としてグループ化された語群と他の語群の弁別がしやすいよう、同一グループの語群に一定の色が施されているが、色の濃淡に意味はない。

て見られ、特徴的なものではない。特徴的な傾向は、実習前の記述では11位以降、実習後の記述では9位以降にみられ、実習前には「低下（11位）」「衰える（12位）」「不安（16位）」「弱い（21位）」「悪い（25位）」といった高齢者を虚弱な対象として捉えた言葉が多かったが、実習後はこうした語が減少し、「元気（13位）」「歩く（24位）」「強い（38位）」などの肯定的な語が見られた。また、「感じる（9位）」「変わる（12位）」「実際（26位）」「違う（27位）」など、学生の態度や思いをあらわす語もみられた。

実習前のサブグラフを図2、実習後を図3に示す。今回は出現数による語の取捨選択にあたり最小出現数を7、描画数を70に設定した。最小出現数や描画数を低くすると多くの語が分析対象となり描画が複雑になる。逆に、出現数や描画数を高く設定しすぎると抽出される語が減り意味の解釈がしにくい。今回は前述した設定で最も意味を解釈しやすい描画が得られたためこの数値とした。

実習前では「人」「多い」「高齢」「身体」「イメージ」「耳」「遠い」などの身体的な面に関する語群、「経験」「知識」「豊富」「考え方」「古い」などの生

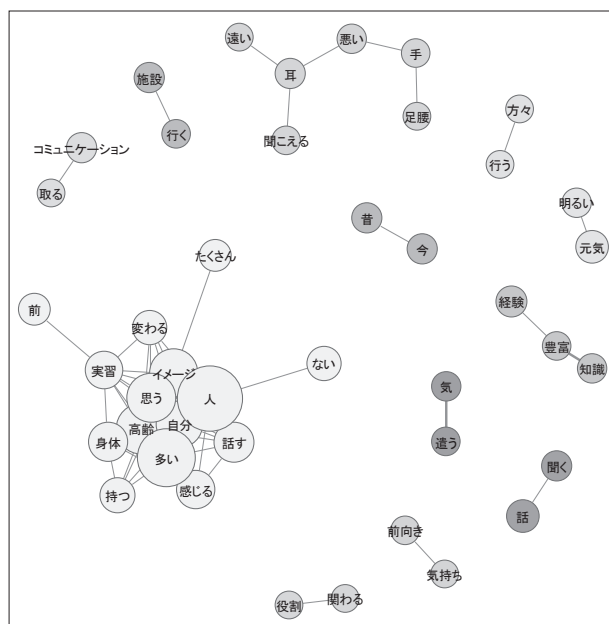


図3 実習後の高齢者観や高齢者イメージの共起ネットワーク分析結果

※つながりの深い語としてグループ化された語群と他の語群の弁別がしやすいよう、同一グループの語群に一定の色が施されているが、色の濃淡に意味はない。

きてこれれた過程や心理面に関する語群、「地域」「ボランティア」「活動」「参加」「縛る」「積極」「貢献」といった地域での活動の様子に関する語群、「経済」「収入」「少ない」「孤独」などの社会的な負の側面を示す語群、「精神」「老化」「起こる」といった認知症などの精神面での低下に関する語群、生活や経済面に関する「年金」「生活」「必要」の語群が抽出された。また、2語からなるグループとして、「免疫」「低下」、「社会」「弱者」、「早寝」「早起き」、「目」「見える（ない）」、「腰」「曲がる」、「気」「遣う」、「話」「よい」が抽出された。

実習後では「人」「多い」「思う」「高齢」「自分」「イメージ」「実習」「前」「変わる」などからなる学生の態度や思いを示す語群、「手」「足腰」「悪い」「遠い」「耳」「聞こえる（ない）」からなる身体的な加齢現象に関する語群、「知識」「経験」「豊富」などの経験や知識に関する語群の他、「気」「遣う」、「役割」「関わる」、「話」「聞く」、「コミュニケーション」「取る」、「今」「昔」、「元気」「明るい」、「気持ち」「前向き」、「施設」「行く」といった語群が抽出された。

両者を比較すると身体的な加齢現象を連想させる語群や、「経験」「知識」「豊富」といった経験値を示す語群は実習の前後で共通して見られた。実習前にだけみられたのは「年金」「収入」「少ない」といった生活の経済的側面と、ボランティアなどの地域活動に関する要素であった。逆に実習後に新たに抽出されたのは「気持ち」「前向き」や「明るい」「元気」といった高齢者に対する肯定的な語群であった。こうした肯定的な語群の他にも「話」「聞く」や「コミュニケーション」「取る」など学生の実習での態度や思いが表出された語群がみられた。

Ⅵ. 考察

1. 記述量にみる高齢者イメージや高齢者観の広がり

実習前に1,044あった文が実習後に653文に減少したのは「箇条書きで記載してもよい」としたため、実習前は約7割の学生が高齢者のイメージを箇条書きで記していたことによる。逆に、実習後は実習体験の様子と結び付けながら長文で記述した学生が増えたためこうした結果が生じたと考える。文の数は実習後に減ったが、総抽出語数は実習前の5,865語から実習後は6,630語と約1.13倍に、異なり語数も1,162語から1,227語と1.05倍に微増した。実習前には高齢者イメージや高齢者観が広がらず記述の少ない学生も見受けられたが、実習後は経験を通して記述が長くなり具体的で多様な表現が生まれ、語数が増えたと考える。

2. 実習前後での記述内容の比較

実習前は頻出語として「低下(11位)」「衰える(12位)」「悪い(25位)」といった語が多く、共起ネットワーク分析でも「高齢」「身体」「イメージ」「耳」「遠い」などの語群や、「健康」「不安」「大きい」「目」「見える(ない)」「腰」「曲がる」がみられ、学生が身体的な加齢現象に着目していたことがわかる。また、身体面だけではなく「経済」「収入」「少ない」「孤独」や「生活」「年金」「必要」といった語群から読み取れるように、高齢者は年金生活となり少ない収入で生活しているといったイメージを抱い

ていた。しかし、負の側面だけではなく「地域」「ボランティア」「活動」「参加」「縛る」「積極」「貢献」の語群など、引退して時間に縛られることがなくなった高齢者がボランティアなどで積極的に地域社会に貢献している姿や、「経験」「知識」「豊富」「考え方」「古い」といった語群にあるように、考え方は古いですが、経験や知識が豊富という肯定的な捉え方もなされていた。

実習後も耳が遠い、手や足腰が悪い等の身体的な特性に関する記述は実習前と同様に見られた。通所型高齢者施設に来ているのは後期高齢者や生理的老化に加え何らかの疾患や障害を抱えた方が多いため、学生の意識が身体的な加齢現象に向くのは当然の結果と言える。1年次に高齢者施設で実習をした学生に実習前後の高齢者イメージをSemantic Differential Method (SD法)で調査した結果でも「弱い」というイメージは実習前後で差がなく、介護が必要で施設に来ている高齢者を目の当たりにし、素直に感じ取ったものと解釈されている(穴井ら, 2012)。

また、「経験」「知識」「豊富」といった語群も実習前後に共通してみられた。身体的には高齢者を虚弱な対象と捉えがちであるが、情緒面で肯定的に捉える傾向にあるのは大谷ら(1995)の先行研究と合致する。高齢者との接点が少ない実習前の段階でも「経験」「知識」「豊富」といった語句が見られたのは、高齢者は長く生きており、経験や知識が豊富であり、尊敬すべき対象であるといった社会規範が学生たちにも根付いていたためであろう。

一方、実習後の特徴的な傾向は「元気(13位)」「歩く(24位)」が頻出語の上位にみられ、共起ネットワーク分析でも「元気」「明るい」や「気持ち」「前向き」といった語群が新たに抽出されたことである。病院や入所型の高齢者施設では疾患や障害が前面に出てしまい、学生は高齢者が本来、備えている力や資質を見出しにくい。そのため、日常的に高齢者と接点の少ない学生は実習で出会った高齢者が高齢者の全般的なイメージとなり、彼らを弱まっている対象と捉えがちになる。本研究で学生が実習した通所施設に通う高齢者は、介護保険を利用し何らかの障

害があって援助が必要ではあるが、病院に入院している高齢者や施設入所の高齢者に比べると比較的健康状態が維持され安定している。先行研究でも学生が健康な高齢者と直接触れ合うことで高齢者に対する肯定的なイメージが生まれることが示唆されている（古村ら, 2003；流石ら, 2004；張ら, 2012；樋田, 2014）。本研究でも実習後には「元気」「明るい」や「気持ち」「前向き」といった語群が抽出されていたことから、通所型施設を実習場所とした場合、学生は疾患や障害だけに捕らわれず、生活者として的高齢者に目を向けることができ、高齢者の弱い面だけでなく、プラスの側面や強さに気づくことができていたと考える。

また、実習後の記述には「感じる(9位)」「変わる(12位)」「実際(26位)」「違う(27位)」が出現し、サブグラフでも「イメージ」の語には「前」「実習」「変わる」が繋がって抽出されており、学生の高齢者への見方が変わったことが読み取れる。特に、実習後のサブグラフでは、「話」「聞く」や「コミュニケーション」「取る」といった語群もみられたことから、学生が、施設スタッフが高齢者の話を聞いたりコミュニケーションを取る様子を見学したり、学生自身がこうした行為を行うことを通して高齢者に対する学びを深めていたと考えられる。

「年金」「収入」「少ない」といった高齢者の生活における経済的側面やボランティアなどの地域活動に関する要素が実習後で見られなくなったのは、生活上の経済的な話しはプライバシーに関わるため、高齢者とのコミュニケーションの中で話題にしにくかったためであろう。また、ボランティアなどの地域社会での活動に関する要素は、介護保険制度を利用する必要のない比較的健康な高齢者における事象であるため、感じ取りにくい要素になっていたと推察される。

今回の知見を概観すると、学生は実習を通し高齢者の身体的な加齢現象は素直に受け止めつつも、実習前の「高齢者は敬うべき存在である」といった社会通念からもたらされる概念的なものだけでなく、高齢者の心理面や社会面での「強み」を実質的に感

じることができていた。

高齢社会白書でも「高齢者のとらえ方」に関して、「多くの高齢者は貧しく病気がちで、子や孫に囲まれて暮らしているという旧来のイメージとは、実態としても意識としても異なる」（内閣府, 2002）や、高齢者の実態と捉え方の乖離について、「このことが多様な存在である高齢者の意欲や能力を活かすうえでの阻害要因になっている」（内閣府, 2012）とある。こうした指摘から言えるのは、高齢であることによるイメージが先行し、実態を知らないことで生じる系統的なステレオタイプ化と差別のプロセスとされるエイジズム（Butler, 1995）の蔓延である。老年看護学実習Ⅰの早い段階で高齢者の実態に触れることで、学生は身体的に虚弱な点は受け止めつつも、高齢者自身が老いや病と向き合いながら前向きに生活している姿に目を向けることができていた。

高齢者に対する肯定的な見方を培う必要性はあるが、ケア対象として高齢者の虚弱な面を正確に認識することも看護学生には必要な視点といえる。よって、学生の高齢者の身体的な「弱み」、加齢現象に対する気づきを今後の学習でケアの視点につなげていく必要がある。奥野（2002）が、看護者の高齢者観は「現実的、客観的、中立的、統合的そして個別的なもの」をめざしていくべきである、と提唱しているように、学生が実際に高齢者と向き合うことで、高齢者の強み・弱みの双方を受け止めていくことが重要である。高齢者の肯定的側面への理解は、高齢者のもてる力を活かしたケアのあり方につながるため、高齢者の強み・弱みを含むすべてを捉える感性を育くめるよう支援していくことが求められる。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究は単年度および一大学での結果であることから結果をすぐに一般化はできない。また、本研究では実習での学びを検証するため実習前後のイメージや高齢者観に焦点を当てたが、今後、学生の高齢者との同居経験の有無や日々の接触頻度と高齢者イメージや高齢者観の関連についても検証をすすめる

必要がある。

本実習では学生の高齢者イメージや高齢者観において肯定的な側面への気づきを促すことができたが、この効果がその後の講義や実習にいかに関係されていくのかも新カリキュラムの進行年次に合わせて継続して検証していきたい。

VIII. 結語

通所型の高齢者施設で実施した早期体験型老年看護学実習の前後で学生が高齢者の身体的な面に関して抱く虚弱的なイメージに変化はなかったが、心理的、社会的な側面については実習後では「元気」「明るい」「気持ち」「前向き」などの記述が増え、肯定的な見かたが生まれていた。このことから、通所型の高齢者施設での早期体験型老年看護学実習は、学生が高齢者の心理面や社会面でのもてる力を実感できる契機となりうることを示唆された。

引用文献

穴井美恵, 荻野朋子, 大平政子(2012): 看護大学生の高齢者のイメージ～高齢者施設における実習前後の変化. 中京学院大学看護学部紀要, 2 (1), 11-17.

Butler RN (1995): Ageism. In The encyclopedia of aging. 2nd ed., by Maddox GL. 35-36, Springer, New York.

Coe RM (1967): Professional perspectives on the aged. Gerontologist, 9, 114-119.

古村美津代, 中島洋子(2003): 健康な高齢者とのふれあいを通しての実習の学び～実習記録の分析から. 老年看護学, 8 (1), 78-85.

樋田小百合, 熊田ますみ, 大瀧康平, 神谷きらら, 桐山美咲, 齊藤かな子, 曾我あゆみ(2014): 健康高齢者との関わりによる看護学生の高齢者イメージ. 岐阜医療科学大学紀要, 8, 7-15.

松下昌子(1997): 看護学生の老人イメージ. 看護展

望, 22 (7), 828.

早川真奈美, 吉田雅俊, 中村恵子(2016): 早期体験実習の意義に関する文献検討. 中京学院大学看護学部紀要, 6 (1), 49-62.

樋口耕一(2014): 社会調査のための計量テキスト分析～内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版, 京都.

文部科学省 (1995): 平成7年度我が国の文教施策第Ⅱ部第4章第3節1 医・歯・薬学教育の改善・充実, 平成29年8月10日, http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199501/hpad199501_2_141.html.

中島紀恵子, 井出訓, 植田恵(2009): 系統看護学講座(専門分野Ⅱ) 老年看護学. 医学書院, 東京.

皆川敦子, 北村眞弓, 三好陽子, 世古留美, 倉田亮子, 三吉友美子, 福田峰子, 藤原郁, 船橋香緒里, 栃本千鶴, 箭野育子, 足立はるゑ(2006): 早期体験実習における看護学生の学び～早期体験実習後におけるレポートからの分析. 日本看護医療学会誌, 8 (2), 33-43.

内閣府(2002): 高齢社会白書 第1章第1節5. まとめ～高齢者の多様性に対応した施策を, 平成29年8月10日, <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2002/zenbun/html/g1150000.html>.

内閣府 (2012): 高齢社会白書 第1章第3節1 (1) 「高齢者」の実態の捉え方と乖離, 平成29年8月10日, http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/sl_3_1_01.html.

奥野茂代(2002): 老年看護学における高齢者観の再考. 老年看護学, 7 (1), 5-11.

張平, 田中敦子, 大塚眞理子, 丸山優, 善生まり子, 飯島加奈子(2012): 看護学生の感想レポートの分析から見た元気高齢者による講義の意義. 老年看護学, 16 (2), 86-94.

流石ゆり子, 亀山直子 (2004): 「健康高齢者実習」の意義～学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討. 老年看護学, 9 (1), 65-75.